



皇朝
 御代
 御筆
 御歌
 宗公
 全

特別
 イ 4
 3163
 21



畢
14
3163
21

宸翰

近衛殿
治代二四年
亥門
亥字
公
步
保
祝

寫



右醍醐天皇四自泳の懸物

ついでとていふことかゝるるはわづらふべき事なり

主上御懐紙 以て紙大細言通誠正序文 寛永三年冬

毎の有春

此の巻はしるし毎の巻はしるしとていふ春の山場

長島村院宸翰

石済集は初古一冊

一 好西院宸筆

百人首

一 中布門院中懐紙

初春侍花

ゆゑくふれ花の心なごころふきよ春の初風

一 好小好院

飛らりしうらまゐりくさめあはれ杖風はまきと

一 寛文帝中懐紙

聖元院御

水石契久

池木のまじき世す玉拍しのわらうと粉ふ

一 好光以花一好物四十一

東照大権現

一 正親所花中懐紙

散玉の菊

たつ子のとともや秋きくたまへの花のむらさ

聖元院

一 仙洞 元禄 少懐紙

伴菊延象

ふとれはふあわくも葉を念御名に林と経わ

一 而今 凶宸物 天保二年

初春書

今めわいさまのりあてふきわのそひのそひ

一 古田院

松風

秋れは老葉の山の松風とらうりふあは

一 古田院 二十有傳子

早春書

ふのふあめりうれわはるるさきしうけあは

澤春書

さきさきいふまじりしは
暁梅

梅の小春よりいへりし
梅の春も梅の法は

花満山

いづくも梅よりいへりし
江上春も

浪うねのちこ江の春も
梅の春も梅の法は

深卯花

途梅をいへりし
卯部

卯部

卯部と梅の春も
卯部

卯部

卯部と梅の春も
卯部

月夜花

此の下の花野うらの雲わたりは空の如く

夕佳

衣のふたを脱ぎしは枝のありふらふわらふ虫の如く

海邊一原

妻ののこりしはさき海にうつとあきまへ

鷹の如く

ふたの如く

衣のたぐひはさきと枝のさへ尾をまはらむとあきまへ

空海夜

誰かへしむるやの言をきまへはうら尾の如く

おきさる

おれはさきとあきまへはの鹿の木のまはらむとあきまへ

深むる

まきふらきくをまへはなをきまへは日かた

古紙書

丁亥年

此の世に生かすは人の業なりとて
世に生かすは人の業なりとて

稀年

かきつゝよきの世なりとて
かきつゝよきの世なりとて

増年

かきつゝよきの世なりとて
かきつゝよきの世なりとて

此年

かきつゝよきの世なりとて
かきつゝよきの世なりとて

後年

かきつゝよきの世なりとて
かきつゝよきの世なりとて

後年

かきつゝよきの世なりとて
かきつゝよきの世なりとて

後年

かきつゝよきの世なりとて
かきつゝよきの世なりとて

後泊

白梅のきりぎりすをよみ下はるの泊りまはれ

家松

ねむの洞より一母のふねをよきしわたり

山家栞

ふゆのたづねをよみけしむと栞のふねをよむ

山家栞

後ふきかきこころし馬の若のきかす

宗神後祝

ふゆのふねをよみかきこころし馬の若のきかす

山木懐石

水まの浦のふねをよみかきこころし馬の若のきかす

宗神後祝

水まの浦のふねをよみかきこころし馬の若のきかす

一 北島初院 只宸初 二幅

古亨二首

一 北條人院

得辨下智願

夕れ去りてはささげのさかたけのふりかへりて

雨智無限願

さきよりかへりてはささげのさかたけのふりかへりて

徹是十方願

あつたえとてはささげのさかたけのふりかへりて

一 花園院 而千銀方 正文

一 北条光院 日 古亨

一 北条厚院 日 古亨

一 北条厚院 日 正文

一 伏見院

日

りりれまらるわらるらりら

一 深草院

日

あひやうねよりはらとくはるる

一 北白河院

日
寺

一 元和帝

北白河院

柳橋交枝

花のすわりはらりらりら
一 北陽院

わらわららりらりらりらりら

一 正院

天満寺一ひわ

一 白

北漢詞林ニ卷ミ

一 日

寺

一 高令

花春反

ふれりまてけりわぬるを花をちりりかた替

一 本西院 九言一紙題家書

一 本古所院 聖号

一新院

日きより二月の大え七言一紙てふ書物と抄りてふ

一 後土御門院御承平

橋邊庵

抄の末にありて夕飯の暮るるゆきと云はれ

みよはきとて也抄りててふ信りて云はれぬ

さきとて一抄りて也上りて云わると云はれぬ春の夜

小蒙田

秋しそふとていふとていふ日とていふ秋の庵

身ふりていふとていふとていふとていふとて

宗此戸の九ツノクニと云々
 況云

五升一して申ふべき事
 石原木口一り
 石原木口一り
 石原木口一り

一 石原木口院

石原木口院の事

一 石原木口院 古今集一部

一 石原木口院

一 石原木口院

石原木口院の事

石原木口院

うらなひのきぬかきくはのちかへくは
陽の光

尾の松

西の空のけしき

白雲可也

秋云

今年も世の中はよくあつた

一本の松

松

一葉の松

松

一和楽

何事も

水もあつた板舟のさむ水の中

一 新四の港 母の年

夏草

夜更けの草花

一 正親町院

平年鑑

交祀

雷中からせりおまのまじりて
かきおまのまじりて
春のまじりて

一 後陽成院

養老

少くも
おまのまじりて
かきおまのまじりて
春のまじりて

近衛唯正の御前

一幅

人丸像

おまのまじりて
かきおまのまじりて
春のまじりて

日信の御前

三元

思ふ代ふく
なまのまじりて
かきおまのまじりて
春のまじりて

近衛龍山公の夢想板

夢想

春の山神のうへへん 神楽はまきいふはあやう 陰うれ

おのつとふにうきものしらす金

春の法楽のため 圓月たり辰上刻より下

刻に友いふより留へる存をきりけり

准三任龍山

三春

春の山ついでにき世にぬかるとはあやう 春やまはは

心辰

杉もいかに松も松も辰のちうへに梅のうへ

甲梅

うのうへに梅も梅も梅も梅の一枚

春月

たふれうちのき辰より梅もあやういふ梅のうへ

花似雪

おのぎまのつらいつとまきと昔花のさしこむ

待部

つらいつとねくき今よりまきとさきまのつら

カミ

みまらふ山つとまきまのうきまきまのうき

細線

山木のきりまきまのうきまきまのうき

萩風

うね木のまきまのうきまきまのうき

萩萩

うねまのうきまきまのうきまきまのうき

朝音

今ねまのうきまきまのうきまきまのうき

野月

まきまのうきまきまのうきまきまのうき

上月

文部省の事務に就くは、
其の事務に就くは、

夕雲

夕雲の如く、
夕雲の如く、

夕雲

夕雲の如く、
夕雲の如く、

夕雲

夕雲の如く、
夕雲の如く、

夕雲

夕雲の如く、
夕雲の如く、

夕雲

夕雲の如く、
夕雲の如く、

夕雲

夕雲の如く、
夕雲の如く、

夕雲

夕雲の如く、
夕雲の如く、

夕雲

かきまゝくたみちかち〜入りのり〜の物〜さきま〜
あま〜

か〜い〜ふ〜し〜は〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あま〜

あま〜い〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あま〜

あま〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あま〜

あま〜い〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あま〜

あま〜い〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あま〜

あま〜い〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あま〜

あま〜い〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あま〜

今あめを降しうへは舟の給ぬ海に只まれば
橋乃

舟の給ぬ海に只まれば

社頭祝

あめを降しうへは舟の給ぬ海に只まれば

右神主に奉

日りにてうへは舟の給ぬ海に只まれば

出書右同是趣么中泳秋

震

あめを降しうへは舟の給ぬ海に只まれば

櫻

あめを降しうへは舟の給ぬ海に只まれば

郭么

あめを降しうへは舟の給ぬ海に只まれば

深き川に身をまかせしるるは

夕雲

夕雲の影をたぐひて夢を深むるは

雷

とてはらへし雷の音は

月夜

月夜の光をたぐひて夢を深むるは

夜更

夜更の静けさをたぐひて夢を深むるは

秋

秋の風をたぐひて夢を深むるは

祝言

祝言の心をたぐひて夢を深むるは

千代光る

若水

一 道徳伝説のよき 漢家への書 一 幅

一 日 山陰の書 一 幅

一 日 日 一 幅

一 日 植家云 正風俾抄一冊 白言古奥書

一 日 書題云 正懐紙

名前のよき書

正心書のよき書 正心書のよき書 正心書のよき書

一 道徳伝説のよき 漢家への書 一 幅

一 日 書題云 正懐紙

一 日 内書

家内記

平家物語のよき書 漢家の國に書ける御書

一 大徳冠 鏡三云

全記正文

一 近衛家之公の所居也 二卷

一 日向尹公 古亭

一 日向三藏院殿 三十一歌仙

一 日向家親公 心経

日向甚遊公 追手歌

一 日向尚通公

牙杖

刻てこら 鹿くままののすすももののむむかかのの初初象

新のそのちすはのりし 十じくくのの初初象

降のしんここときん 十じくくのの初初象

一 日向植家公 古亭

一 日向信尹公 古亭

一 日向直家公 古亭

一月 家遊公 亭
一月 信平公

落洛春月

ふとふたの山をいつと花は都日ふとふた春はゆふ

一月 信平公

夕陽花

わたりとふとふと夕陽花のちとふとふと

一月 二院院殿 天神山自無瀆 天神山自

一月 信平公 政事公山信公

一月 基遊公 新山信公

一月 易然集

一月 家遊公 梅月無瀆

一月 内前公 無瀆 二橋野

権毫

諸君は所水信公
信平公は山信公

此の便所の春をさへいかに好む花のまはるゝ

松乃ぬ

松乃ぬや松乃ぬのふら松乃ぬ松乃ぬのふらといふは

一日 松乃ぬ 中 常子 乃 親之 級之 乃 乃 乃

一日 松乃ぬ 古 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

一日 松乃ぬ 布袋 乃 自 無 乃

可憐 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

一日 宗 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

一日 松 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

一日 自 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

松乃ぬ此及び乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

西 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

一日 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

一日 家久公 山陰是 仙居申おろく

一日 家久公 八尾係 廣 あつし
あつし
あつし

一日 是與公 常祇係 山自無廣

中 宗祇

可 宗祇

一日 前久公 待飲系 山氏山 是軸

一日 是與公 羽子無 山氏山 山陰

一日 宗想公 大冬字 山橋對

一日 家久公

わ の

あ の

一日 春野

山居也 景小

おらまきの橋

春野上

非印の春からさあつて
わらわの春からさあつて

一日 信春

春夕

花さししれりる涙の痕も又たけりるわらわ

橋

一日 信春

点加茶家祇法は

春夕

際つくと木のくちや木のまきと鳥のさかすま

木のまきと鳥のさかすま ちんやうりやん 鳥とりのいんま 鳥とりのいんま

鳥とりのいんま

一るは木のまきと鳥のさかすま

柳のまきと鳥のさかすま

ん又二丁から

らん文事一十巻(一)系武戸抄(二)下
抄(三)下(四)下(五)下(六)下(七)下(八)下(九)下
抄(十)下(十一)下(十二)下(十三)下(十四)下(十五)下

一日内書

河原切書

西仁高尾記度守

真山極口詠歌

武藏野月 名所ん

あしひらき入山宿のふりさき日るまじきしづめの名 名所ん

散花 落れん

あしひらきふりさきのふりさき日るまじきしづめの名 名所ん

且久志

つやまのつよきん中身を細く今しん後しんよりあつた

かひのちるまのちるまのちるま
花はなのちりまのちりまのちりま

らんわらわららんのちりまのちりまのちりまのちりまのちりまのちりま

あつたまのちりま
ちりまのちりまのちりまのちりま

あつたま
ちりまのちりまのちりまのちりまのちりま

けりまのちりまのちりまのちりま

わらわらわらわらのちりまのちりまのちりまのちりまのちりまのちりま

あつたまのちりま
ちりまのちりまのちりまのちりま

ちりまのちりまのちりまのちりまのちりま



